

『ダーバァヴィル家のテス』考察

——その象徴性から探る人間性復活への叫び——

宮 崎 由 江

1

トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840—1928) は 1840 年 6 月 2 日、南イングランド、ドーセット州の首邑ドーチェスター近郊の小村、ハイアー・ボカムトンで、石大工トマス・ハーディの長子として生まれた。

ハーディ家は斜陽ではあったが祖先には、ハーディ海軍大佐、トラファルガー海戦の際ネルソン提督の旗艦「ヴィクトリー号」の艦長であった人物が居る。そういった環境の中でハーディは、しっかりと上流階級の衰退を感じ取っていたのだろう。後の彼の小説の重大テーマとなる。

ハーディの時代は、ちょうどイギリス資本主義の発達が頂点に達した、いわゆる「ヴィクトリア時代」である。ところが 1870 年代以降になると、他諸国も生産力を付け、部門によってはイギリスに追いつき、又追い越すようになった。そこで製品市場・資本投下地拡大の為に植民地獲得に乗り出した。

産業革命は工業上の変革であっただけでなく、農業にもこれに対応する農業革命が並行して起こった。工業の発達に伴って商工業人口が増すと、穀物への需要が高まり農業経営の改善・能率の向上が要求された。営利主義的な大地主は、耕地集中の為に、第 2 次囲い込み運動を始めた。広い土地を持つ地主は、それを農業家に貸して経営させた。一方、これまで農村の中堅として活躍して来た富農層は、そのうちの一部が農業家として留まったほかは、囲い込みによって没落し土地すら失って単なる農業労働者となった。こうして農業においても資本主義的経営が確立した。

以上のように、外には帝国主義的に勢力を拡大し 7 つの海を支配したが、内にはその繁栄と裏腹に多くの病体を抱えてきており、その中でハ

ーディは、特に近代産業の前で崩れて行く農村の様相にスポットを当てたのである。

ハーディの主要な作品の1つである『テス』についての批評の変遷を追ってみたい。

このハーディの傑作『テス』は、その出版当初から賞賛と悪評の落差が甚しく評価が定まらなかつた。一般的な評価としては「哀しい一婦人の生涯の物語であり、民話風の語り口で語っている」と見られていた。

ところが、T・S・エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888—1965) は「極端な主情主義は精神の頹廢を意味する」とし、S・モーム (Somerset Maugham, 1874—1965) は「ハーディ文学は衰亡する」とまで悪評した。

『テス』を評価した皮切りは、H・C・ダフイン (H・C・Duffin) の「トマス・ハーディ論」(“Thomas Hardy: A Study of the Wessex Novels.”, 1916) である。この中で彼は、『テス』を万事好調に運べば後世の図書館に永遠の場所を見出す小説としている。

アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) の「イギリス小説序説」(“An Introduction To The English Novel”, 1951&1953) では『テス』をイギリス文学の中で、小作人階級の世界の破壊を一(中略)一もっとも感動的に表現した、見事な小説、倫理的寓話として聳え立つ、とした。

メリーン・ウィリアムズ (Merryn Williams) は「ハーディとイギリスの田園」(“Thomas Hardy and Rural England”, 1972) でハーディ作品を社会に関係させて考え、テスの教育と母親の教育を比べ、彼女達が一緒にいた時は、ジェイムス I 時代とビクトリア時代が並置されていた、と語り、『テス』の中心テーマを教育問題に置いた。

こういった批評の流れを踏まえた上で、『テス』を読み進めて行くと私の中に、ある疑問が生まれて来た。それは、アーノルド・ケトルの「イギリス小説序説」でも触れられているように、『テス』をリアリスティックな人間心理の研究の書と見ると、テスは聡明さや世間知の点では、同じ年頃の百性娘についてごく自然に考えられるのより段違いに劣って

いはしまいか。あの感性の鋭敏さそのものが少々眉唾ものではないか。」¹⁾と思われてしまうということである。

例えば、テスが最後にアレックを殺した事について考えてみる。テスには今までのアレックに対する恨み・怒りがあり、エンジェルの赦しが十分に理解できなかったのだろうが、エンジェルの衰弱を見ても、彼が人間的に真実変わったということは分かったはずだ。それならばなぜアレックを殺さなければならなかったのか。この問題点を人間心理の探究として見れば、テスは大変に衝動的・利己的女性だと分析される。しかし、これを社会的側面から見ると、小作人階級の破滅の過程での弱々しくも力強い精神の抵抗として無理なく受け取れる。

この観点に基づいて、私は『テス』を、社会的に特に19世紀後半の社会状況の中での農業社会の衰退という面から掘り進み、さらには、その社会に生きた人間にも考えを及ぼしたい。そして人生を暗中摸索している現代人への一筋の光を見い出そうと試みしてみる。

2

まず、この作品の表題から大きな意味を持っている。『ダーバァヴィル家のテス』という表題は、テスの「家」に中心的意義を置いている。そこで、この表題はテス自身よりもむしろテスの属している階級全体を問題とし、新興都市階級により滅び、裏切られる古い小作人階級を象徴している。

場面は、五月下旬のある夕方、マーロット村から始まる。テスの父親、酒飲みの怠け者で見えっ張りのジョン・ダービィフィールドは、偶然トリンガム牧師から、自らの血統の正統さを聞かされる。

これは単に、今後のストーリーの展開上の糸口ではない。それは小説の基本テーマ、つまりダービィフィールド家がかつていかなる家であったのか、そしてそれがどうなるのかを語っているのである。そしてテスの悲劇は全てここから、由緒正しい祖先の発見から始まるとは旧体制社会の完全な崩壊を暗示している。時同じくして、後には破壊の使者とな

るエンジェル・クレアとの出会いがある。エンジェルと2人の兄達が、この踊りの前に現われたということは、その踊りの活気が洗練された都会生活の攻撃によって危険に晒されるということの意味する。

苦しい境遇であっても、何とか生計を立てていたある日、ダービィフィールド家の唯一の馬プリンスを、テスの油断から殺してしまう。この事件によって、テスは罪の意識を抱き、それが為に彼女は母親の説得を聞き入れて、トラントリッジのダーバァヴィル家を訪ね、自分達の家より裕福な暮らしをしているこの偽の同門の分家に対して親戚名乗りをする。ここで、アレック・ダーバァヴィルの名前の虚偽は、内側の腐敗の外側の目に見える印である。力を振るっていた都会文明にも、内側から少しずつひびが入って来ているということである。

この親戚名乗りは、テスの第1回の不幸、心身共に疲労困憊した夜、森の中でアレックに処女を奪われることを招く。

テスはアレックの元を去り、トラントリッジを出てマーロット村へ戻り村人の中傷を浴びながらも強く働き続ける。その中で赤ん坊が生まれたが、すぐ幼い命は絶たれ、牧師が洗礼を引受けようとしないので、真夜中自ら式を行なって埋葬してしまう。

ここで、テスは煩わしい社会の偏見から完全に自由となり、飾りも何もない「裸の一人の人間」²⁾となった。アレックの子を埋葬するという事が、虚飾を埋葬することなのである。

On one point she was resolved: there should be no more d'Urberville aircastles in the dreams and deeds of her new life. she would be the dairymaid Tess, and nothing more.³⁾

ある1点で彼女は決心した。それはこれ以上、彼女の新しい生活の夢や行為の中にダーバァヴィルの空中楼阁が存在すべきではないということである。自分は搾乳婦のテスであり、それ以上の何ものでもないのだ。

5月の始め、テスはタルボセイズ酪農場へ乳絞り娘として行く。そこで以前「クラブの遠足」で会っていた、一人の青年エンジェルに出会い、まもなく二人は恋に落ちる。

やがて、テスはエンジェルと結婚することになり、その式の晩、自分の過去をエンジェルに告白する場面で、エンジェルの真の姿が現われる。

‘My position—is this,’ he said abruptly. I thought—any man would have thought—that by giving up all ambition to win a wife with social standing, with fortune, with knowledge of the world. I should secure rustic innocence as surely as I should secure pink cheeks ; but—However, I am no man to reproach you, and I will not.’⁴⁾

「ぼくの意見——それはこうなんだ。」と彼は突然言った。「ぼくは、こう考えたんだ——どんな男でも考えることだろうが——それは社会的地位、財産、世間一般の知識を持つ妻を得る大望を全て諦めることによって、桃色の頬を得るのと同じ位確実に素朴な純潔さを手に入られると考えたんだ。だが——しかし、ぼくは君を非難できる男じゃないし、そしてぼくは非難しない。」

この言葉は単にエンジェルの評価を現わしているのではない。もちろん「心理ドラマ」⁵⁾の一面でもない。つまり、エンジェルが属している都会文明を象徴しているのである。アレックとは異なった面、内的な精神的な意味での都会文明を表わしている。官能主義者アレックの外的な農村社会への侵入よりも、エンジェルの表面はそれとは分からない内的侵入の方が、より恐怖を高める。

エンジェルとテスの結婚は、破局を迎え、エンジェルはブラジルへ、テスは実家へ戻った。しかしテスは実家にはいたたまれず、プリントコ

ム=アッシュの農場へ出発する。ここからテスの墮落が始まる。

the whole field was in colour a desolate drab, it was a complexion without features, as if a face, from chin to brow, should be only an expanse of skin. The sky wore, in another colour, the same likeness, a white vacuity of countenance with the lineaments gone. So these two upper and nether visages confronted each other all day long, the white face looking down on the brown face, and the brown face looking up at the white face, without anything standing between them but the two girls crawling over the surface of the formen like flies.⁶⁾

畑全体は荒廃した汚ない褐色だった。それはあたかも顎から眉までただの皮膚の広がりというような特徴1つない顔色だった。空は別の色ではあるが、同じような輪郭の無い白く空虚な顔色をしていた。そうして、それら2つの上下の顔はお互いに一日中直面していた、白い顔は褐色の顔を見下げ、褐色の顔は白い顔を見上げ、その間には、何の特徴も無かったが2人の女が蠅のように上記の前者の表面を這っていた。

この描写には、恐ろしい「絶滅のイメージ」(a terrifying image of annihilation)⁷⁾が存在する。資本主義農業は労働者の全てを奪って行く。目鼻立ちの無い顔色は、人間が介在しない、人間が支配される農業を象徴する。人間の尊厳が全く無い労働である。テスは、ここで賃金労働者から「最も搾取される労働者」(the most exploited form of wage-labouress)⁸⁾へと墮落して行く。労働者は「ハエ」(flies)の状態にまで衰微して行くのである。

プリントコム=アッシュで働いている間にテスは説教師となったアレックに偶然再会する。アレックもテスの魅力の前では、即座に元の官能

主義者アレックに戻ってしまい、テスにしつこく迫る。アレックはテスの仕事場にも押しかける。

この仕事場での発動機係の男の描写がある。

What he looked he felt. He was in the agricultural world, but not of it. He served fire and smoke; these denizens of the fields served vegetation, weather, frost, and sun . . . holding only strictly necessary intercourse with the natives, . . . The long strap which ran from the driving—wheel of his engine to the red thresher under the rick was the sole tic—line between agriculture and him.⁹⁾

彼の感じることは彼の外見と同じようなものだった。彼は農業世界にいながらその中には入っていなかった。彼は火と煙に奉仕していたが、畑の居住者達は植物、天候、霜、そして太陽に奉仕していた。—(中略)—厳格にも土地の人々とは、ただ必要な交際しかなかった。—(中略)—麦やまの下を彼の発動機の動輪から赤い脱穀機まで走る長い革帯が、彼と農業の間の唯一の絆だった。

この発動機係は人間性豊かな労働者間の関係を全く否定する。彼自身の内にも人間は存在していない。機械を動かす「もの」でしかない。営利追求のみの新農業は、この様な人間を生み出してしまうのだ。彼の様な人間が増して行けば、遠からず思いやり、自尊心など全く無い社会が出来上がるのは当然である。農業と彼とを結ぶ唯一の絆が、長い革帯一本とは、まるで寒々とした荒野を見るようである。分業化され、能率化されて行く農業は、それ自体素晴らしいものではあるが、人間の心まで分業化されては困る。

フリントコム=アッシュではテスは搾取されるのみであるが、それでもまだ「テスの墮落の最終段階 (the ultimate stage of her degradation)¹⁰⁾」ではない。テスはまだ、アレックを拒否している。彼女の全てであると

言っても良いエンジェルを心の中で大事に育てている。

ところが彼女のその支えも崩される時が来た。父の死によって借地権が切れ、マーロット村にテス一家は滞まる事が出来なくなってしまったのである。

そこで、この村自体から起こる問題がある。資本主義農業となると、地主はとにかく広い土地を所有し独立していない農業家達に貸して能率高く耕作させたいのである。従って小さい土地を独自で耕作したり、家だけ持っていて他の土地へ働きに行くという事は、地主にとって快いものではなかった。労働者一人一人がこのような状態で仕事に誇りを持てるだろうか。興味を持てるだろうか。もちろん能率良く耕作し、より多くの作物を収穫することは人口増加傾向にある国にとって必要なことではあるが、それで村という共同体が殺伐として良いものだろうか。この共同体の冷酷さはテスに対し、内的・外的に圧迫を与え、彼女を最終段階にまで追い込んだ。正に、テスは共同体の犠牲である。資本主義とは農業体制ばかりでなく、社会の最小単位「家族」までも崩壊してしまうのである。

もうテスには、どんな方法も残されていなかった。唯一アレックの援助を受けること以外には。ここでテスの終局的墮落が訪ずれたのである。

エンジェルはブラジルで病気に罹り、変わり果てた姿となってエミンスター牧師館に戻って来た。

テスのもとへ訪ねて来たエンジェルは、かつてのエンジェルではない。自分の「背景の制限」(the limitations of his background)¹¹⁾と先入観を壊そうともがき始めた時から、真に「土の子」(child of the soil)¹²⁾となったのである。

テスはそんなエンジェルに対して「おそすぎる」と言って別れを告げる。

テスは、エンジェルがもう帰って来ないと言って自分を誘惑したアレックを責め喧嘩となり、とうとう彼女はアレックを殺してしまう。

このテスの殺人は、彼女の最後の精神の抵抗である。アレックという

都会文明に押し流され、漂っていたテスの魂が再びエンジェルの登場で高揚したのである。テス、つまり滅びて行く旧農業労働者は、その全てを掛けて侵入する資本主義農業（アレック）に一矢を報いたのである。いや、むしろ警告を発したのかも知れない。従ってテスには、何の悔いも残っていない。返って、その自己主張に満喫を憶えるのであった。田園社会の伝統、人間性が、雄大に目の前に開けるような気持ちを覚える。

テスは、エンジェルの後を追ひ、二人は逃亡するが、ストーンヘンジでテスは逮捕され、ウィントンスタアで処刑された。

テスの処刑によって「古代田園地方」(an ancient country line)¹³⁾は終局を迎えた。しかし、その終局は全ての終わりではない。テスの魂に象徴されているように、その伝統は脈々と波打って今だに人々の心の中に存在するのである。都市化に大きく傾いている文明人の奥深くにあり常に警告を発し続けている。

最後の場面で、テスの妹ライザ=ルーがエンジェルと手をつないで丘を降りて行くのだが、これはこの作品の救いである。テスが自らの命まで投じて都市文明に抵抗をした壮絶な戦いの後、将来に対する一筋の光を見出したことを現わしている。エンジェルは自分で嫌っている過去の遺物に規制され、大事なものを失った。しかし今は違う。彼は、その遺物を切り捨て本当の自分自身の姿に戻った。その彼は理想とされる都市社会を象徴しているのである。一方、ライザ=ルーは何にも染まっていない田園社会の素晴しさである。この二人の調和こそがハーディの望む、現代社会像であろう。

3

この作品を味わう上で、どうしても忘れてはならない要素が情景描写である。「描写」というと作品の「背景幕」¹⁴⁾と感じられがちだがハーディにおいては作品にとって必要不可欠なものとなっている。

又、この小説全体から、私は『赤』という色が非常に鮮明に浮き上がって来るのを感じる。例えば、ダービィフィールド家の唯一の馬プリン

スの死の時の真紅の点滴，又は赤い揚穀機，アレックを殺した時の深紅の色の点を中央にもつ巨大なハートのエースなどである。

ところで、ハーディは、ジョーゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（Joseph Mallord William Turner, 1775-1851）という「風景のあらゆる点に通じた男」と言われた、ロイヤル・アカデミー会員の画家に傾倒していた。ちょうど『ダーバアビル家のテス』を執筆中にも彼は、ロイヤル・アカデミー巨匠回顧展を訪れ、ターナーの作品に刺激され、メモを残している。

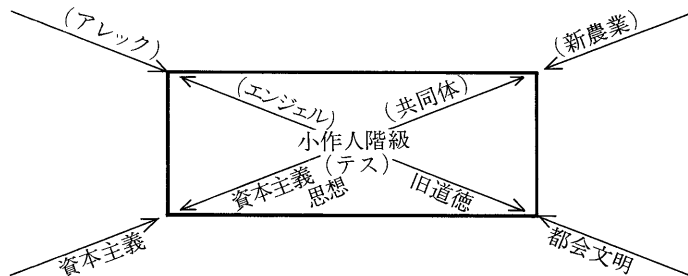
まず彼（ターナー）は、現実の風景の中にあるすべてをキャンヴァスに再現することの不可能を認める。次にその再現できないものに代って、彼は見るものの上にそのリアルなるものの効果に近似の効果을及ぼすであろう別のものを与える。彼は最も狂気の、最も偉大な時期にこんな言葉を漏らしている。「どんな絵画的麻薬を人びとに調合してやればよいのか、どうしても伝達不可能なこのリアリティの効果に多少とも似た効果をもつどんな薬を？」そして彼は「雨と蒸気とスピード」—（中略）—等々において向かっているような、あの見なれない混合薬の調合にとりかかった。所詮アートとは、偽せのものによって真なるものの効果をいかにして作り出すかの秘訣である。ということができるだけ¹⁵⁾。

このメモには直接には現われていないが、ターナーが彼のテーマとして生涯追い続けたものは、「世界の底に横たわる深い現実」である。ハーディも正に同一のテーマを持っていたのである。このメモは単に目前にある物体を描写するという問題だけでなく、目に見えないものを描写する事も含まれているのである。ハーディはターナーの作品の中に自分の小説における表現の苦悩を見たのである。そして作品のテーマをいかに強く鮮明に表現するかについてのヒントをハーディはターナーの絵から学んだのであろう。

作品を理解するには登場人物と同じ場面を経験することが必須条件であるが、この情景描写も「赤」も『テス』において設定された場面を体験するために大きな力となっている。

4

この作品の内容上の構成の概略を作図してみる。



小作人階級、大概的には旧農業社会は外的・内的両要素によって崩壊させられた。エンジェルの示すところの旧道徳・共同体の示す資本主義思想・新農業の示す資本主義・アレックの示す都会文明と、四方八方からテスの示す小作人階級は圧力を掛けられ「挑戦して勝利をおさめることができずただ漠然と恐れることしかできない」¹⁶⁾ ままで破滅する。

現代において約 100 年前に書かれたこの作品のこうした内容は何か意味を持つだろうか。

もちろん、疑いもなく現代社会の抱える病巣を指し示している。ハーディの先取性の確かさには驚かされる限りである。

現代は正に資本主義万歳の世の中である。何百年も前に始まった資本主義が現在まだ存続し、しかも社会の中心となっているのである。しかし、その体制の開始当初からの問題が今だに解決されていない。それは営利追求から来る合理化により人間性が失われ、社会秩序が乱れ殺伐とした世界になっているということである。この問題を解決し、人間が人間らしく生きて行く為の研究が多くの学者・作家達によって成されたが、的を得た解答は出されていない。しかし、この問題には正解などは存在

せず、ひたすら悪戦苦闘を繰り返すことで出口を見つけ出すしか良策が無いのかも知れない。ハーディも解決策を示しているのではなく、悪戦苦闘の中で人間の姿勢と将来の一つの試策を示しているのである。時代と共に人間性を奪って行く怪物は巨大化して行く。従って現代人が自分を見失わずに生き方を摸索することは困難を極めるだろうが、その努力を怠れば人間が人間たる由縁、人間らしさまでも失なわれてしまうのである。最も根本的な、人間存在の土台が崩れてしまうのである。

エンジェルという人物は、自分では人間の真実を求めているようであるが、実際は過去によって規制され、反対に大きな悲劇を生んでしまう。現代にも、この種類の人間が数多く存在する。彼らは知的近代化はされているにもかかわらず、管理社会の必要性から生じた過去の遺物を後生大事に抱え込んでいるのである。彼らは、管理社会のそういった陰謀に微塵も気づかず日々残酷危険度を増して行く。この危険は学歴社会には無くなることのないものである。受験戦争と言われる最近の教育界では、人間性豊かな教育などとは言ってられないのだろうが、人間愛・社会の安定を等閑にして教育が成立するのだろうか。社会の中で教育の占める位置は非常に高い。なぜならば、教育は次代を担う人間を育てる場だからである。教育における人間性の欠如は、そこで止まらず彼らの成長後の社会に顕著に表われるのである。一步立ち止まって回りを見渡さなくてはならない時を迎えている。

将来の社会の在り方の一例としては、エンジェルの改心した姿とライザ=ルーの純粹さの両立である。ハーディは、エンジェルを現代社会に立ち向かい悩む自分自身と二重にしているのだろう。過去の遺物を引き摺ったまま現代に生きて来たが、障害によって目から鱗が落ち真実に目覚める。彼は自我に気づいた理想的都会人となる。

ライザ=ルーは自我に目覚めてはいないが、その体の中に豊満な人間性を湛え、都会人の失ったもの全てを備えている。彼女が真に都会文明によって開花すれば正に社会人の理想となる。

エンジェルが示す理想的都会像と、ライザ=ルーが示す理想的田園像が

釣り合い始めてハーディの望む現代社会となる。

一方、最近ハーディブームが巻き起こり、『テス』は映画化された。この現象は、ハーディ文学の代表作『テス』の物語の面だけでなく人間性復活というテーマに、人々が共鳴していることを示している。ハーディ自身、この正解の無い困難な問題に真正面からぶつかり、試行錯誤を繰り返しその中から辛うじて見つけた糸口を経験から得た励ましを余す所なく披露してくれる。

『テス』は、一女性の激しい葛藤を繰り返した崇高な生涯の物語として、人間性復活を高らかに謳い上げた問題小説「ロマン・アテーズ」¹⁷⁾として今なお、世界の文学の中で巖として光彩を放っている。

注

- 1) 小池 滋, 山本 和平, 伊藤 欣二, 井出 弘之『アーノルド・ケトル イギリス小説序説』(研究社, 1974) p. 241.
- 2) 深沢 俊『トマス・ハーディ+深沢 俊』(れんが書房, 1971) p. 164.
- 3) *Thomas Hardy: Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan London Ltd, 1975), pp. 127—128.

以下同書からの引用は、ページ数のみを示す。

- 4) pp. 263—264.
- 5) 小池 滋, 山本 和平, 伊藤 欣二, 井出 弘之『アーノルド・ケトル イギリス小説序説』 p. 239.
- 6) p. 309.
- 7) *Merryn Williams: Thomas Hardy and Rural England* (London: The Macmillan Press Ltd, 1972) p. 176.
- 8) *Ibid.*, p. 175.
- 9) pp. 348—349.
- 10) *Williams, Thomas Hardy and Rural England*, p. 177.
- 11) *Ibid.*, p. 178.
- 12) p. 392.
- 13) *Douglas Brown: Thomas Hardy* (London: Longmans, Green, 1954) p. 92.
- 14) 小池 滋他三者, 『アーノルド・ケトル イギリス小説序説』 p. 246.
- 15) 大沢 衛, 吉川 道夫, 藤田 繁『20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ』(篠

崎書林, 1975) pp. 258—259.

16) 小池 滋他三者, 『アーノルド・ケトル イギリス小説序説』 p. 250.

17) *Ibid.*, p. 236.